

第10回 生きものと暮らす

自分を含め、頼りにしてくれるかわいいペットたちは、人々の心を癒してくれるパートナーとして、かけがえない存在となつていきます。でも、家族の暮らし方と合わないときには、困ることや悩むことも多くなりますね。そもそもペットってどんな生き物なのでしょう？ うまく折り合いながら一緒に楽しく暮らすには？ そのヒントを、ここでは、特に「犬」について探ってみましょう。

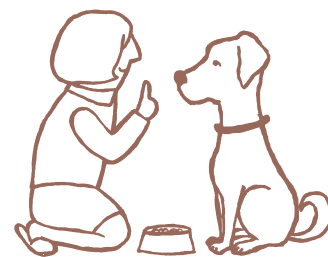
だから、ペットとの暮らしは楽しい。

●存在感を増したペットたち

言葉は通じなくても、自分を求め、慕い、頼りにしてくれるペット。見ているだけで、何とも言えない愛おしさがこみあげてきます。

ペットは、人の暮らしの中で生きるのに適した、あるいは適するように改良されてきた動物です。だから、人の支えがなければ生きていけません。成年になっても子どものように愛らしい存在のままのペット。飼い主である私たちを批判したり評価したりすることなく、いつも予測ができる範囲の情緒的反応を示してくれます。その精神的な安定感も、ストレスの多い現代でペットが存在感を増している理由かもしれません。

内閣府の調査によると、ペットを飼う理由として「気持ちよわらわら」（まきれる）が二十年前の約二・五倍、「家庭内がうまいく」という理由にいたっては五倍以上に増加しています。



●素顔を知って、彼らの行動を理解する

ペットとの暮らしはいい時ばかりとは限りません。例えば、犬。とてもおとなしい良い子と思っていたのに、いきなり吠えたり、汚したり……。どうしたらよいかわからず、悩んだり嘆いたりしていませんか？ でも、犬の方も「どうしてボクの苦手をこぼさず強要するの？」と思っっているかもしれません。静かにしてほしい時に限って吠えるから困る……。それは人間側の理屈。犬はそもそも「吠えるのが仕事」なのです。

祖先のオオカミは、もともと群れで行動をしていました。ですから犬はそのルーツゆえの行動があり、「わが家のライフスタイル」に、なじむこともあれば、なじまないこともたくさんあります。

犬本来の習性＝素顔を知らずに、「可愛い」「癒される」という思いだけでは、良好な関係を持続することはできないのです。人とペットとの幸せな暮らしはそれが安定して持続してこそ成り立ちます。

まずは、「ペットの素顔」を知って、彼らがそもそもどんな行動をとる生きものか、知ることから始め

●「コンパニオン・アニマル（伴侶動物）」という考え方

家族や人生のパートナーとしての役割が大きくなるにつれ、「ペット（愛玩動物）」は、「コンパニオン・アニマル（伴侶動物）」という言葉で、語られることが増えてきました。「人間が一方的に愛玩するために生まれてくるのではなく、生来の行動や生活の質も尊重されるべき固有の存在である」という考え方の表明です。

獣医学者のC.ローゼルは「ペットは毛皮をまとった人間のミニチュアではない、動物の人格化を行ってほしくない」と述べました。かわいがるあまり、平等の概念がわい曲し、動物の人間視につながりがちです。しかし、からだの構造や機能も異なれば本能も異なるのですから、人間の世界にあってはめるような接し方は、その動物独自の個性を否定することに他なりません。違いを認め、けじめをもつて接することが、彼ら独自の尊厳を尊重することになるのです。

人の思いや都合だけで接するのではなく、生きものとしての生活の質を尊重すること。それが、幸せなペットライフの基本となります。

そして、飼い主にとって困る行動、と思っていたことが、彼らにとっては、ごく自然なことなのだ、とまずは、理解してあげましょう。

●歩み寄ることで築く「幸せな関係」

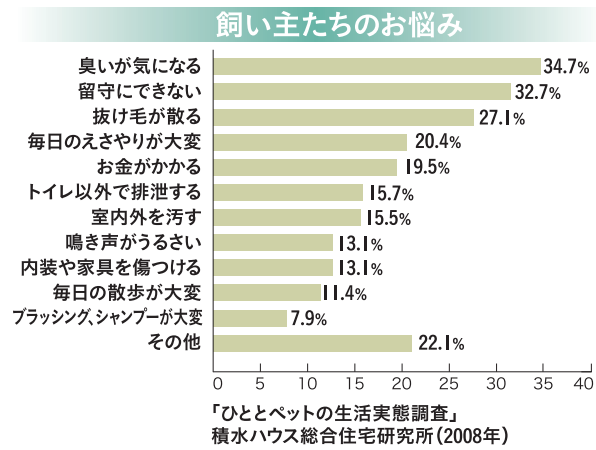
犬本来の習性に基づいた行動が、わが家のライフスタイルに馴染まない時、歩み寄る工夫をしなければ、「しつけ」は、そのひとつ。

犬のしつけは、社会や家族の員として暮らすために必要なものです。たとえ主従関係が苦手であっても、それは、責任をもつて行う必要があります。本能をうまく利用して「それが人によろこばれる」という刷り込みをすれば、ある程度のコントロールは可能なのです。

「しつけ」だけでなく、「飼い主の努力」や「住まいの工夫」も大切です。毎日散歩を欠かさないと、飼い主の努力。散歩から帰って室内へ入るときに、足を洗える便利な場所をつくるのは住まいの工夫です。グラウンドメゾンでは、ペット用の足洗い場が設置されているものもあります。

ペットの素顔を見つめ、自分や家族とペットの歩み寄り方を見つめること。そうすればペットとの暮らしが、より一層心豊かな日々になるでしょう。

「生活リテラシーbook004「生きものと暮らす」」より抜粋及び一部編集
*内閣府「動物愛護に関する世論調査」（1998年2003年）



ペットについての詳しい情報は積水ハウスのホームページで公開中の「すまいすまいる」(「with PET Lab」)をご覧ください。
「生活リテラシーbook」の購入や、「ディアワン」カタログの請求ができます。

「すまいすまいる」アドレス
<http://sumai-smile.net>

僕たち犬はこんな生きものです！

●物音に敏感です

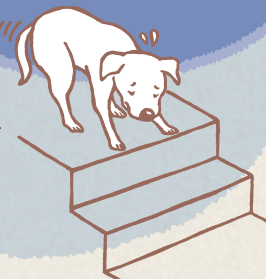
番犬としての役目を負ってきたのは、たとえ眠っているときでも小さな物音や知らない人の足音に敏感に反応できるから。花火や雷などの大きな音は怖くて、パニックに陥ることもあります。



鼻と耳はよく利きますが「見るのは苦手」

●段差は苦手です

目が左右についているので、立体視できる視野は人間の半分。そのため階段は傾斜のように見え、階段の前で慎重になるのです。



●散歩に行けないとストレスになります

もともと自然の中を走り回っていたので、歩くことも走ることも生活の一部。散歩先で匂いを嗅ぎ、知り合いの犬と出会うことは、大切な情報交換にもなっています。

狩猟時代の名残りで「歩くことは生きること」

●引っ掻いたり噛んだりします

仔犬は、歯がむずがゆいときや、遊びの延長で物を噛んでしまいます。家具や柱、電気コードなどもかじる恐れがあるので危険です。



●床で滑ります

表面がつるつるした床は、爪を立てることができないので滑りがち。転んで怪我をすることも少なくありません。

●暑いのは苦手です

寒冷地で改良されてきた犬種は被毛が豊か。冬の寒さには対応できますが、夏場、人と同じように熱中症にかかる危険もあります。

家の外で暮らしてました「爪と被毛は野外用」



人の手によって、さまざまな特性を生かして改良されてきた犬は、さまざまな外見を持っています。それでも、本能にもとづく習性や能力は、若干の違いこそあれ大差はありません。



群れがキホンだから「リーダーがいると安心」

●吠えるのが仕事でした

群れを守るために、大きな声で吠えます。威嚇であるだけでなく、仲間への伝達手段でもあるのです。

●飼い主はリーダーです

リーダーの指示に従い、群れの秩序を守ることができます。命令をよくきき、姿が見えていると安心する一方、リーダーと離れると不安になってしまう犬もいます。

●子犬は遊ぶのが仕事です

集団で生活してきたので、本来は集団の中で仲良く遊ぶことができます。小さいころに犬同士で遊んだ経験が少ないと、成犬になってから集団でうまく遊べないことがあります。

